

三商レポート

第十八話 「借金とうつと自殺」

(株) 三商 内藤 雄

自殺者が年間3万人を超えています。しかも7年連続です。1日に90人・1時間に4人です。自殺未遂は、最低その10倍いると推計されています。

交通事故死も悲惨ですが、自殺は交通事故死の4倍以上です。

年齢は、60歳以上の高齢者が最も多く、次いで40～50歳台の働き盛り世代です。動機は、警察庁の発表によると①「健康問題」②「経済・生活問題」③「家庭問題」の順です。とりわけ最近は②が増加しており、その中身は(イ)「借金」(ロ)「生活苦」(ハ)「事業不振」となっています。性別では、男性のほうが女性より圧倒的に多くなっています。

統計上の数値を並べただけでは、「ふーん」程度にしか伝わらないかもしれません。しかし、個々のケースに直面すると、自殺の重さに言葉を失います。私は、「借金」に悩む本人や家族と接する機会が多いので、いろいろな場面に出会います。ご主人が自殺した直後の妻・娘から「遺書」を見せられ相談されたことがあります。時折笑顔で話す妻・娘に違和感を覚えました。しかし、突然の死を実感できない思いを知らされました。

「借金」は、いろいろな事情で始まります。今は簡単にお金を借りられます。「今をしのげば」と、やむを得ず、ときに安易に無理な借金を重ねる人がいます。一発逆転を狙ってギャンブルにのめり込む人もいます。どんどん深みにはまって行きます。やがて厳しい取立てが始まり徐々に追いつめられて行きます。「何とかしなければ」ともがくものの、何ともなくなっていく。目つき・顔つきが変わり、服装も乱れ始めます。電話や人の気配におびえ、寝不足になり、仕事も手につかなくなってきました。気分が沈み、酒の量が増します。ふがいない自分を責めます。家の中では不機嫌になり孤立して行きます。こうした状況が続くうちに選択肢が減ってきて、何かのきっかけで自殺を選択してしまいます。

自殺に追い込まれた人の多くは、“うつ”の症状になっています。しかし、本人は自分が“うつ”という病気であることに気づいていません。「自分が弱いからだ」「体調が悪いのも気のせいだ」と思い込んでいます。一般にも、“うつ”は単なる心の問題で、深刻な病気と考えられていません。しかし、“うつ”も真正銘の病気です。「うつ病は、今では様々な有効な治療法がある。怖いのはうつ病になったことではなく、それに気がつかずに放置しておくことだ」(防衛医大 高橋祥友氏)との指摘は重要です。

「一人で悩まず、まず家族に打ち明けることから始めませんか。お金のことは、後で何とでもなりますよ」のアドバイスと夫婦・家族の協力で心と体とお金の問題を解決していく人もたくさんいます。しかし、最後まで一人で頑張ってしまう人もいます。実は、自殺した人も直前まで「死ぬしかない」と「生きたい」との狭間で揺れ動きながら、「この人なら分かってくれるかもしれない」と思う人を選んでサインを送っているのです。それに気づいてあげれば、そして聴き役になってあげれば防ぐことができるかもしれません。不幸にして大切な人が自殺してしまうと、身近な人は「何で」「どうして」と死者を責めます。やがて気づいてあげられなかった自分を責め続け、自分が“うつ”になることもあります。事後の対応も大切です。難しい課題に皆で取り組まなければなりません。 **自殺予防 いのちの電話 042-327-4343**